

今本リーダー素案

(今本案)

4 - 3 利水のあり方

(1) 水需要予測

これまでの水資源開発基本計画では、水道事業者および自治体等による用途別の水需要予測を積み上げ、不足量をダムや堰等の水資源開発施設の建設により開発するという方式がとられてきた。しかし、需要予測が利用実績に比べて過大であるとの批判に加え、予測手法や予測に用いた原単位や諸係数が公表されないという不満がもたれてきた。

これからは、水需要予測に関わる情報を公表するとともに、より精度の高い予測手法の開発に努める必要がある。また、一定期間ごとに予測の見直しを行ない、利水管理に反映させる必要がある。

(2) 節水・再利用

これまでの節水は、主として湯水時の対策として検討されてきたが、これからは平常時の対策として積極的に推進するものとする。住民もまた、水を大量に消費するこれまでのライフスタイルを、節水型のものへと転換する必要がある。

再利用には、同一系内で循環・反復利用するタイプのものと、ある系で利用したものを再び別の系で利用するタイプのものがある。いずれのタイプの再利用も、水の純消費量を節減するうえで有効であるが、これまではごく一部で実施されているに過ぎず、これからは生活用水、工業用水、農業用水のいずれについても、積極的に推進する必要がある。

(3) 用途変更

河川から取水する権利には、許可水利権と慣行水利権とがある。許可水利権については、河川管理者が一定期間ごとに見直してきたが、農業用水を中心とする慣行水利権については、一部を除いて見直されることはほとんどなかった。しかし、これからは、すべての水利権について実態ならびに将来を見据えた聖域なき見直しを行ない、積極的に用途変更を行なう。

なお、農業用水については、農業目的に使われるばかりでなく、消防水利などの生活用水として多面的に使われ、さらに地域の水環境や生態系を維持する重要な要素となっていることを配慮して、農業用水としての利用が減少した場合でも、単純に用途変更をするのではなく、農業用水路とともに自然豊かな地域資源へと再生することが必要である。

(4) 環境用水

河川は自然環境および生活環境を構成する重要な要素であり、両者を合わせた河川環境を保全するために必要な流量が環境用水である。

河川は、その成り立ちから考えればわかるように、ありのままの自然にまかせるのが本来のあるべき姿であり、自然公物といわれる所以である。われわれは、河川がこのような自然公物であることを尊重し、人為的な改変や利用は極力抑制しなければならない。したがって、河川

からの取水についても、環境用水を優先なものとして取り扱い、つねに河川流量の一部にとどめる必要がある。

なお、環境用水には2種のものがある。一つは、渇水時の河川環境を保全するもので、これまでの維持流量と類似しているが、維持流量は、その流量さえ維持すれば河川環境は保全されとの発想にもとづくのに対して、環境用水は、河川環境の保全にはできるだけ多くの流量が必要であり、限界が設定されないところが根本的に異なっている。他の一つは、河川の基本的特性の一つである攪乱機能に関連するもので、洪水がもたらす生態系への攪乱も必要であるとの認識に立脚している。

前者については、河川からの取水量を規制することにより、かなり容易に実現できるが、後者については、ダムや堰等の利水機能を根底から覆す恐れがあるため、放流操作による対応のほか、高水敷の切り下げなどの河道形状による対応についても検討する必要がある。

(5) 水需要管理協議会

水需要に関しては、河川管理者および利水関係者の間に、共通の問題意識を形成する場としての流域水利用協議会、渇水時の斡旋または調停を行なう渇水調整協議会等が、必要に応じて設置されると定められており、現在でも、河川管理者はある程度の調整機能をもつが、より強い指導・調整力をもつ「水需要管理協議会」の設置が必要である。

水需要管理協議会は、関係省庁、自治体、水道事業者、慣行水利権者等の利水に関わるすべての関係者が参加して、水需要についての協議・調整を行なうもので、河川管理者が主催・運営し、学識経験者、住民代表等も参加させた公開のものとする。

なお、水需要に関わる危機管理の対象として、各種の利水施設における水質汚濁、水質事故、異常渇水等があるが、これらに対して適切に対応するには、水需要管理協議会が中心となって、平常時から対策を確立しておかねばならない。

(6) 順応的な水需要管理

気候変動や社会情勢の変化あるいは地域条件などにより、新たな水資源の開発が避けられない場合もあり得る。また、安定供給のためには、供給能力にある程度の余裕をつねにもつことが必要である。

このような不確定要素に対応するには、河川は自然公物であるとの原則にのっとり、順応的な水需要管理を行なうことが重要である。